平成 26 年度大学院派遣研修報告書

派遣者番号	25Ｊ03	氏　名	佐野　智美
研究主題 ―副主題―	間違いに対する児童の意識と間違い出合わせ教授法の効果		
所属校	江戸川区立鎌田小学校	派遣先	早稲田大学大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	教育において重要なことは、児童になるべく失敗経験をさせないことではなく、失敗に対する柔軟な態度（失敗から学ぶ態度）を育成することである。しかし、失敗や間違いの観点を中心テーマに取り上げて授業研究が行われることは少ない。本研究では、児童が学習場面で多く出合うと考えられる間違いや失敗を取り上げる。間違いや失敗に対して児童がどのような意識をもっているかについて実態を明らかにし（研究１）、そこで得られた問題に対して教育的にどのような介入が考えられるか検討し改善を試みよう（研究２）とするものである。
Ⅱ　研究の方法	研究１ 公立小学校第５・６学年児童 225 名を対象に、「間違い観」「思考過程重視度」「間違い対処行動」「間違い役立ち観」について質問用紙を用いて調査した。「間違い観」では、間違いを肯定的に捉えているか、否定的に捉えているかを測るための質問を五問行った。「思考過程重視度」では、答えが合っている方が重要か、考え方が合っていた方が重要かを点数化させ、回答を求めた。「間違い対処行動」では、間違えたときに児童はどのような対処行動をとるかについて回答させた。「間違い役立ち観」では、「間違い観」を具体化し、間違いは学習理解に役立つという学習可能性を意識しているか調査した。 研究２ 研究１で対象となった児童のうち第５学年３クラス 97 名に対して、授業を実施した。授業は、理科「吹き矢の科学」（２時間）算数「分数を比べよう」（１時間）で、理科・算数それぞれの授業後に授業後調査、最後の授業後調査の後に全体の事後調査を行った。

Ⅲ　研究の結果	研究１の結果、多くの児童は間違いを肯定的に捉えていることが示された。ただし、間違いを否定的に捉えている児童が３割程度いる実態も明らかになった。間違えたときに「なぜ間違えたのか、どこで間違えたのかを見直してやり直す」など好ましい対処行動をとる児童は、全体の約半数にとどまる結果となった。また具体的な場面に即して考えさせると「間違えたけれど理解を深めることができた」や「間違えたけれど、二つの解き方を知ることができた」という「間違い役立ち観」を重要と捉える児童の割合は約半数と低くなった。これは「100 点をとること」や「１回で正答すること」への児童の意識の強さが考えられる。つまり、児童は間違いを肯定的に捉えてはいるが、間違えたときにどのように対処をすればいいのか認識できていないのではないか、また、実際の学習場面では、間違いが学習理解に役に立つものだという実感をもっていないのではないかということが考えられる。 研究２の授業後の調査においては間違いから学ぶことがあるという肯定的な回答が多かった。また誤答を取り上げた授業に対して、好意的に捉えた回答も多く見られた。授業で失敗経験や自己の間違いを自覚することがあっても、取り上げ方によって、児童は間違いを肯定的に捉えることができるようになるということが示唆された。全体の事後調査では、介入授業後の授業後調査と同様に、児童の「間違い観」は、事前に比べて間違いを肯定的に捉える傾向が高まる結果となった。
Ⅳ　考察	授業を行った結果、全体の事後調査から児童の好ましい間違い観の得点が上昇し、間違いを肯定的に捉える児童が増えたことが示された。特に事前に間違いを否定的に捉える群の得点が上昇し、間違いを授業で取り上げることの効果が示された。今後の実践上の課題としては、多くの多様な間違いをどのように授業に組み込むかである。また「間違い観」だけを変容させるのではなく、理解に結び付けた学習活動を展開することである。誤答を取り上げる授業が学習内容の理解に有効であることが考えられ、間違いを理解につなげ、間違いを役立たせる授業づくりが今後の課題である。